

300万点達成「出来るときに出来ることを」

熊本市立碩台小

熊本市立碩台小学校（杉水修校長、児童137人）のこれまで集めた点数が今年1月、300万点を達成しました。ベルマーク活動はPTA 撫子会の総務委員会が担っています。6月末、活動に携わる保護者5人に集まってお話の機会をもちました。

PTAの「撫子会」という名前は、校花がカワラナデシコであることが由来です。PTA活動のスローガンは「できるだけ、できるしこ」。熊本弁で「無理なく、出来るときに出来るだけのことをしよう」という意味を持ちます。運営の中枢を担う「委員」と、より気軽に参加できる「係」があり、どの家庭も活動に参加できる体制が整っています。

総務委員は現在13人。今年度の委員長を務めているのが松村智子さんです。この日は、委員の内田真美さん、江口優子さん、山中千尋さん、そして昨年度に委員長を務めた田中智美さんも駆けつけてくれました。

同校のベルマーク活動について、「小さな校区なので、卒業生や地域の皆さんにも応援してもらっています」と田中さ



① 300万点達成の感謝状を手に、PTA 撫子会総務委員会の皆さん（撮影・古瀬英子教頭）



② 児童一人ひとりに配るベルマーク回収袋 ③ 江口さんが山中さんに集計のコツを伝授 ④ 撫子会交流室にはベルマーク整理棚がある ⑤ 2016年にベルマーク預金で買ったクーラー

ん。収集には地域住民も積極的に参加しています。例えば、地元のからあげのお店は、業務で使う商品のベルマークを約10年前から学校に寄贈しているほか、昨年は匿名の方から郵送でマークが届いたそうです。さらに田中さんは「卒業生の保護者から、マークを手渡してもらうこともあります」とも教えてくれました。

マークの回収は学期に1回。児童には、担任の先生を通じて1人1枚ずつ

回収袋を配布します。回収袋が集約できたら、子どもを介して総務委員の家庭に届くという流れです。回収を促すために、年度初めには、保護者に向けた配布物を総務委員長が作成します。集まったベルマークは、1学期に1回、仕分け・集計します。財団への発送は年1回です。

仕分け・集計の活動について「先輩ママと情報交換をすることもでき、コミュニティとしての機能が大きいと思う」と

話してくれたのは委員の江口さん。コロナ禍になってから、保護者同士の交流の機会が減ってしまった中、集まることは「貴重な時間」と説明してくれました。

地域の協力も得ながら、ベルマークを集めてきた碩台小。現在、お買いもの話が出ているそうです。子どもたちを写すためのカメラが欲しい、古くなった楽器を買い替えたいといった意見があり、これから検討していくとのことでした。

14年連続でマーク寄贈

株式会社ナック、さらなる認知度向上を目指す

株式会社ナック（本社・東京都新宿区）から、ベルマークとインク・トナーカートリッジが届きました。同社IR・広報室の松田萌絵さんと鈴木麻由さんが7月15日にベルマーク財団を訪れ、寄贈してくれました。同社は2009年からベルマーク収集に取り組んでいて、今年で14年連続の寄贈です。

ももとは親会社であるナックだけで収集していましたが、前回の寄贈分からはグループ全社も協力しています。従業員数はナックグループ全体で約1600人にもな

ります。

さまざまな社会貢献活動を展開しているナックグループですが、最も長く取り組んでいる活動がベルマーク収集だといいます。「収集の取り組みを広げるため、活動の認知度を高める広報活動に力を入れています」と松田さん。そのひとつが、社内用のwebサイトを使った「CSR通信」での情報発信です。より多くの人の協力を得るために、収集のお願いをするだけでなく、ベルマークを集める意義の説明もしているそうです。



左から、ナックIR・広報室の鈴木麻由さん、松田萌絵さん、ベルマーク財団の小野高道常務理事

会場にベルマーク回収ブース

スナッグゴルフ対抗戦JGTOカップ全国大会

ベルマーク財団が後援している「スナッグゴルフ対抗戦JGTOカップ全国大会」が7月17日、福島県西郷村のグランディ那須白河ゴルフクラブで開かれました。

一般社団法人日本ゴルフツアー機構（JGTO）が主催し、今年で19回目。コロナ禍の影響で、昨年から東日本大会と西日本大会に分けて開催しています。この日は、地域予選を勝ち抜いた北海道から東海地方までの23校118人の小学生が参加しました。

JGTOは昨年秋に開かれた西日本大会から、会場にベルマーク収集の取り組みを始めました。事前に、ベルマーク運動



のしくみや意義を説明した冊子を配布し、「ベルマークを10点持参すると記念

品をプレゼント」とアナウンス。会場の受付横にはベルマークブースが設けられ、回収箱にマークを入れた子どもたちには、記念品のJGTOオリジナルキーホルダーが手渡されました。

スナッグゴルフは、クラブのヘッドがプラスチック製で、ショットを打つ時にランチパッドというゴム製のマットを使います。ファスナー素材の旗の土台に、テニスボール大の球をくっつける（snag）ことで、ホールアウト。この大会では、1チーム3人以上6人以下で9ホールをプレーし、上位3人の合計ストロークで順位を決めます。

全国大会の特徴は、プロゴルファーの宮里優作、増田伸洋、塩見好輝、伊藤有

志、寺岡颯太、山路幹、松本将汰の7人も参加すること。「JGTO ドリームチーム」として、子どもたちと同じ用具とルールで勝負に挑みます。

試合が始まると、子どもたちは一転して真剣な表情に変わり、あちこちから「ナイスショット」「ナイスオン」「惜しい！」などの声が聞こえてきました。アルバトロスやホールインワンを決めた小学生選手もいて会場は大いに盛り上がり、プロたちも負けじと、子どもたちの目の前で力強いショットを披露しました。

優勝は、ストローク数79の笠間市立友部小学校。2位は笠間市立北川根小学校、3位は常陸大宮市立大宮小学校。3校とも茨城県の学校でした。

大会最後のあいさつをしたのは、震災復興枠で出場した、岩手県・宮古市立宮古小学校の渡邊征一郎さん。「活動を支えてくれている皆さん、ありがとうございます」と感謝の気持ちを伝えました。



◇
後日、JGTOの宮内勝・貢献事業部長と山田寛さんが大会で集まったベルマークと、JGTO社内で集めたインク・トナーカートリッジを財団に届けてくれました。宮内さんはベルマーク回収について、「子どもたちや保護者の収集への意識が高まってきている」と感じたそうです。